

セーラーのあなたに落ちたひとひらの
桜を払う手つき慣れたよ
小島 涼我

一読した時に妙な違和感を覚える一首だ。〈セーターの〉、〈ひとひらの〉と意図的に切れ目なく繋げていく進行の中で、定石ならば結句は【慣れた手つきよ】と一気に流してゆくのが自然であろう。しかし、作者は〈手つき慣れたよ〉と結んでいる。

【慣れた手つきよ】と〈手つき慣れたよ〉では、多少意味合いに違いが生まれる。前者は、あくまでもあなたの慣れた手つきをただただ傍観している立場であって、後者の方は、あなたの所作に慣れた自分に急にカメラが向けられる。その結果として、ひとひらの桜のように、いつか自分も払われるのではないかという不安が目前に迫ってくる。

コートに降った雪は
少しずつ溶けていって
いつまでも眺めていたいと思った
いけす

では、この詩はどうだろうか。これは先ほどの話でいうと、ただただ傍観している静けさのある詩である。このコートの持ち主が他者なのか自分なのかはわからないが、この詩においてさほど重要なことではない。ただ、この詩の中にも溶けてゆく雪と自分を重ねる部分がある。それによって生まれたある種の自己消失欲求がこの詩の傍観的な静けさと相まってうまく表現されている。

中山